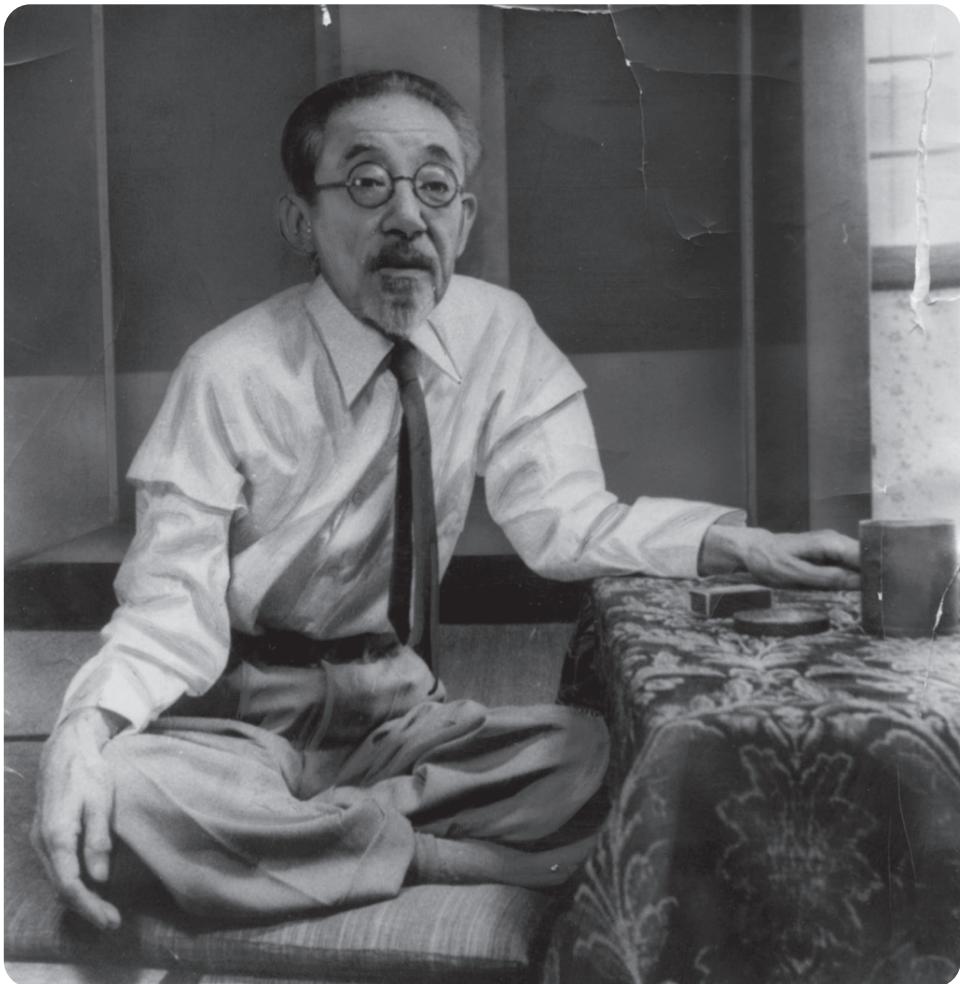


| 西暦 | 和暦 | 年齢 | ことがら |
|------|------|----|---|
| 一八六八 | 慶応四 | ○ | 八月二三日、厚見郡佐波村（岐阜市）青木久衛の長男として誕生。母は、安八郡神戸村（神戸町）高橋杏村の娘琴。 |
| 一八七八 | 明治一 | ○ | 佐波村の小学校卒業、母の実家の叔父高橋鎌吉に書画を習う。厚見郡日置江の青木東山の漢学塾に通う。 |
| 一八八二 | 明治一五 | 一四 | 大垣の旧藩儒野村藤蔭の塾に入学。数か月で退塾、家事を手伝う。 |
| 一八八五 | 明治一八 | 一七 | 四月東京専門学校（早稲田の前身）に入学、政治・法律を学ぶ。 |
| 一八八九 | 明治二三 | 一三 | この頃跡見女学校の助教（漢字・歴史）をする。 |
| 一八九一 | 明治二四 | 一三 | 新橋ステーションで、跡見女学校生原屋寿子（横浜の生糸王原善三郎孫）と出会い。 |
| 一八九八 | 明治三一 | | 五月一八日、跡見女学校長跡見花蹊が来岐、富太郎の原家へ養子入りし、屋寿子との結婚の承諾を取付ける。六月一三日横浜の原家で屋寿子と結婚式を挙げる。 |
| 一九〇〇 | 明治三三 | | 一〇月一八日、濃尾大震災発生、郷里岐阜へ帰り、佐波村や親類縁者の救済（善三郎出金）に当たる。善三郎没し、家業を担う。主な番頭は自立させる。大学出を積極的に雇用し、海外進出を準備。 |
| 一九〇一 | 明治三四 | | 原商店を合名会社に改組し、生糸販売に加え、輸出を開始する。 |
| 一九〇二 | 明治三五 | | モスクワ・リヨン・ユーヨークに代理店設置。以後各地に代理店を置く。 |
| 一九〇三 | 明治三六 | 三五 | 原輸出店を独立させる。株式会社第一銀行の頭取になる。 |
| 一九〇六 | | 三八 | 三井経営の富岡・名古屋・栃木大嶋・四日市の各製糸工場が経営破綻していたのを引き受け、立て直す。本牧二之谷に、京都大徳寺黄梅院旧天瑞寺塔覆堂を移築する。 |
| | | | 井上馨から仏画の名品「孔雀明王像」を購入。この前後から、古美術の蒐集と、原家の三溪園の造成と古建築の移築保存を進める。 |
| | | | 三溪園を一般公開する。 |

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | ことがら |
|------|------|----|--|
| 一九〇八 | 明治四一 | 四〇 | 観桜会を開く。株式經濟協會設立。下村觀山作「大原御幸繪巻」購入。 以後安田鞆彦・今村紫紅・小林古徑・前田青邨・速水後舟ら日本画家の作品を購入し、支援する。 |
| 一九一四 | 大正三 | 四六 | 京都府加茂村から燈明寺三重塔を移築。日本美術院再興。 |
| 一九一五 | 大正四 | 四七 | 蚕糸業救済のため、帝国蚕糸株式會社設立し、社長になる。 |
| 一九一六 | 大正五 | 四八 | インドの詩人タゴールが三溪園に二か月逗留。鎌倉の廢寺心平寺地蔵堂を移築し、天授院と命名。 |
| 一九一七 | 大正六 | 四九 | 青海覆三郎から購入した臨春閣を移築。茶室蓮華院建造。 |
| 一九一八 | 大正七 | 五〇 | 京都三室戸の金蔵院から月華殿と春草廬を移築し、金毛窟を建造。 |
| 一九一九 | 大正九 | 五一 | 茂木合名會社倒産に際し、七十四銀行を整理し、横浜興信銀行設立、初代頭取となる。 |
| 一九二〇 | 大正一〇 | 五二 | 白雲邸を移築し、住居とする。 |
| 一九二一 | 大正一一 | 五四 | 徳川家光ゆかりの聽秋閣を東京一条邸から移築。 |
| 一九二二 | 大正一二 | 五五 | 茶会大師会を催す。八月、野村洋三と箱根強羅の白雲洞で休養中、関東大震災に遭遇、道路遮断中、徒步で帰宅。 |
| 一九二三 | 昭和一 | 五六 | 大被災の横浜復興に尽力。横浜貿易復興会長、横浜復興会長として、復興の中核となる。 |
| 一九二四 | 昭和二 | 五七 | 第一銀行を横浜興信銀行に合併。 |
| 一九二五 | 昭和三 | 五八 | 神奈川県匡済会会长に就任。 |
| 一九二六 | 昭和四 | 五九 | 中村房次郎と東北一巡の写生旅行。 |
| 一九二七 | 昭和五 | 六〇 | この頃、岐阜の伊奈波神社前の水琴亭が、米屋町に移築するのに、横浜の宮大工を引き連れ、改修に尽力。臨春閣を写した一階建ての別棟を建て、壁画・襖絵を描く。 |
| 一九三六 | 昭和一四 | 六一 | 長男善一郎急逝。その後友人和辻哲郎・谷川徹三を招き茶会を催す。 |
| 一九三七 | 昭和一二 | 六二 | 後鳥羽上皇七〇〇年祭にあたり、「上皇肖像」を皇室に献上。八月一六日死去。 |

たか ぎ てい じ 高木貞治



書斎の高木貞治 岐阜新聞社提供

- 大野郡(現在の本巣市)数屋出身の世界的数学者
- 子供の頃より神童の誉れ高い英才
- 小学校を飛び級で卒業
- 岐阜県尋常中学校 現岐阜高校から京都第三中学校を経て
帝国大学数学科へ進む
- 東京帝国大学教授 微分積分学講義担当
- 高木類体論を発表
- 文化勲章受章

神童の誉れ高い

高木貞治は一九七五(明治八)年大野郡数屋に生まれた。母は嫁に行つたが、嫁ぎ先の水などが気に入らず、貞治がお腹にしるうちに高木家に戻つた。高木家に子供がなかつたため、貞治は高木家の養子となつた。養父勘助は母の兄にあたる。

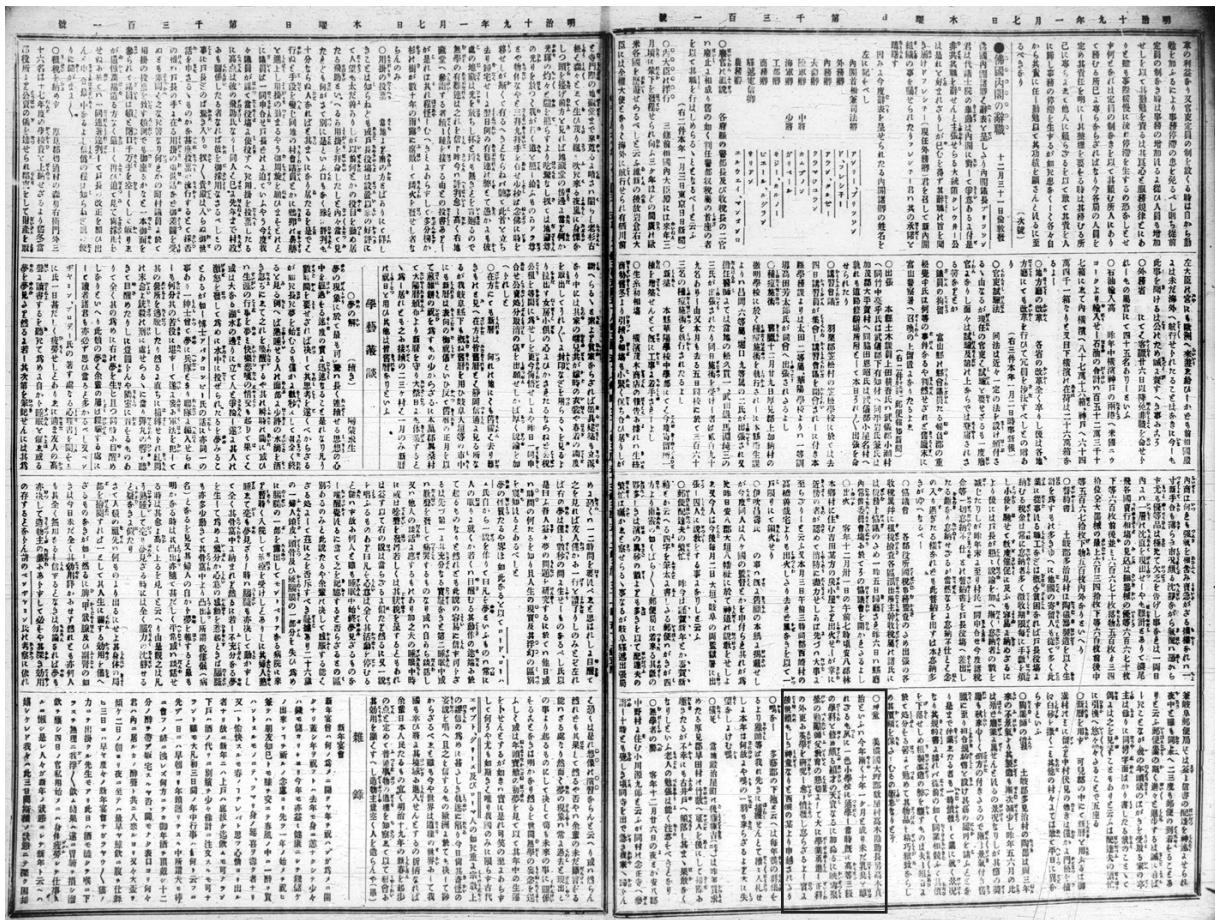
貞治は幼少期より記憶力に優れ、親に連れられて行つた寺で聞いたお説教を、家に帰つて、一言一句間違わずに再現することができたといつ。貞治のただならぬ才能を見抜いた勘助は、四歳の頃より近くの野川湘東のもとに通わせ書や画を習わせた。野川は医師で、漢籍、南画に通じた人物であつた。

当時の貞治の英才ぶりを示す記事がある。明治一九年一月七日岐阜日日新聞に掲載された「神童」と云ひの記事である。以下に引用する。

美濃国大野郡数屋村高木勘助長男高木貞治といふわ(は)今年漸く一〇年一ヶ月と成り未だ乳臭を離れざるも、夙に一色小学校に通学し、当時既に高等三級の学科を修め頗る頴才の天資なるに加ふるに、映雪聚室の勉励、師父教育の懇切にして大に学业勇進し、正科の外更に英学を研究し愈々奮發し怠らざるよし。實に後世頼もしき神童なりと西濃の某より申越されたり。

一〇歳一ヶ月の子供の英才ぶりが新聞の記事として掲載されるとは、貞治の神童ぶりが世間に知られていたことに驚きを禁じ得ない。

高木貞治



1886年(明治19年)1月7日 岐阜新聞掲載

○神童 美濃國大野郡數屋村高木助長男高木貞治といふ今年漸く十年一ヶ月と成り未だ乳臭と離れるも夙に一色小學校に通學一當時既に高等三級の外更ふ英學を研究一愈々憤發し怠らざるよ一寶み後世賴もしう神童なりと西僕の某より申越されり